

科学よもやま話

佐藤 勝昭

第16回

技術者倫理とコンプライアンス

昨年来、ヒト胚幹細胞（ES細胞）の論文データ捏造、一級建築士による耐震強度の偽装など、科学者、技術者のかかわる不祥事が相次いでいます。

お隣の国で起きたヒトES細胞の捏造事件はノーベル賞への過度の期待が引き金になったといわれていますが、同じような論文捏造問題が、わが国でもいくつかの大学で起きています。多額の研究費の助成を受けて進めている先端科学研究では、短期間の成果が求められ、このために先を争って著名な科学雑誌に論文を掲載しようとするのが捏造の背景にあったといわれています。数年前には、米国のベル研究所でもデータ捏造事件がありました。科学技術に携わる人間としてやるせない気持ちになります。

マスコミは、科学者・技術者個人が高い倫理観を持ってさえおれば、捏造や偽装は起きないので、「技術者倫理」教育の強化が必要だと論じております。しかし現実にはそれほど簡単な問題ではあ

りません。

私の所属する大学では、科学ジャーナリストの松尾義之先生に「技術者倫理」を教えていただいています。松尾先生の講義は、評判が高く教室に入りきれない学生がでるほどです。先生は「耐震強度偽装の建築士は、キミたちの明日の姿だ。家族を養い、仕事を失うことができないときに、キミたちは本当に偽装しないと言えるのか。」と問いかけ、自分ならどうするかを作文を求めます。これまでは、単に傍観者として建築士を批判していた学生は、自分がその立場になった場合のことを問われて初めてその問題の大きさに気づくのです。

この問題は本誌の読者にも無関係ではありません。2002年、原子力発電の検査データ改ざん問題がおきました。あの事件で電力会社は結果的に社会の信頼を失い、発電再開の大幅な遅れを招きました。現在では、企業をあげてコンプライアンス（法令遵守）の確立に努めていると聞いていま

すが、もし早い段階で技術者倫理が企業の論理に打ち勝っておれば、これほどのダメージを受けることはなかったでしょう。

したがって、技術者倫理は個人の倫理観の問題でだけでなく、企業の社会的責任を保障する安全装置でもあるのです。このことの社会的合意なしには、偽装事件を防ぐことはむずかしいのではないのでしょうか。

（東京農工大学 副学長）



ヒヤシンス畑（オランダ、ノールトワイケルハウト） 佐藤 画